

2003年7月

40～60代の全国男女900名に聞いた 現代人の死生観

第一生命保険相互会社(社長 森田富治郎)のシンクタンク、第一生命経済研究所(社長 石嶺 幸男)では、40～69歳までの全国の男女900名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

このほど、その結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

目次

アンケート調査の実施概要	1
【先祖祭祀はどの程度行われているか】	2
【一般的な俗信について気にするか】	3
【死にまつわる俗信について気にするか】	4
【遺体に対するイメージ(家族と他人との比較)】	6
【お墓の意味合い】	7
【お葬式の意味合い】	8
【死への不安】	9
【研究員のコメント】	10

*この冊子は、当研究所発行の調査月報、「ライフデザインレポート」の6月号の要約です。
「ライフデザインレポート」を6月号ご希望の方は、
右記の広報担当までご連絡ください。

お問い合わせ

株式会社第一生命経済研究所
ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当/岸

〒100-0006

東京都千代田区有楽町 1-13-1

TEL . 03 - 5221 - 4772

FAX . 03 - 3212 - 4470

アンケート調査の実施概要

1. 調査対象 全国の 40～69 歳の男女 900 名
(第一生命経済研究所の生活者モニター)
2. 実施時期 2002 年 9 月
3. 調査方法 質問紙郵送調査法
4. 有効回収数(率) 871 名(96.8%)
5. 回答者の属性

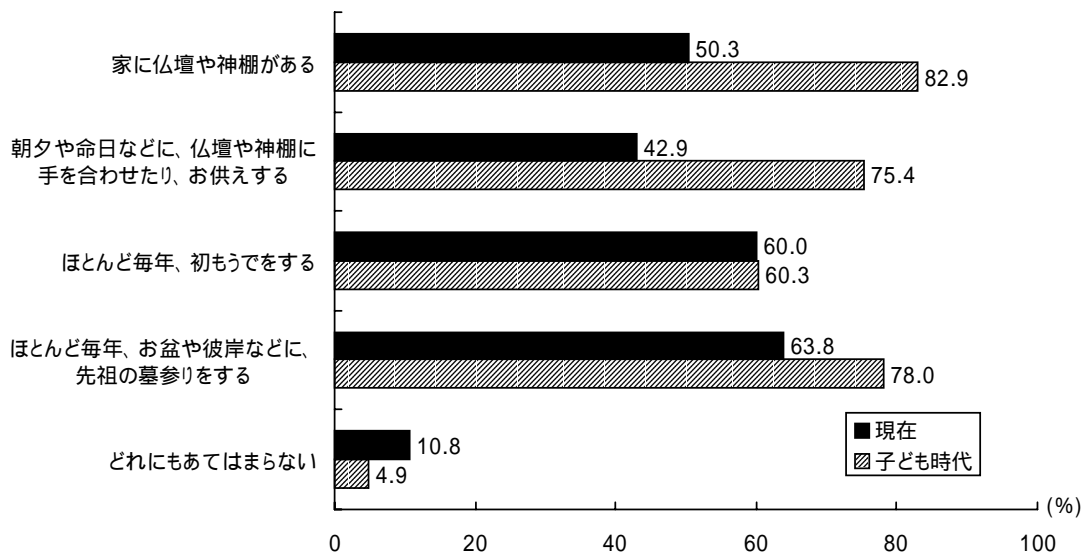
(単位:人、%)

性別	男性	440	50.5
	女性	431	49.5
年代	40 歳代	287	33.0
	50 歳代	288	33.1
	60 歳代	296	33.9
婚姻状態	未婚	54	6.2
	既婚	759	87.1
	離・死別	58	6.7

先祖祭祀はどの程度行われているか

現在、家に仏壇や神棚がある割合は半数程度。

図表1 先祖祭祀の変遷



現在、先祖祭祀がどの程度行われているかを調べるために、仏壇や神棚の保有状況、お墓参りなどの実態を、回答者の子ども時代と現在とで比較して聞いてみました（図表1）。

その結果、「ほとんど毎年、初もうでをする」以外は、すべての項目において現在の実行率が大きく下がっています。なかでも、仏壇や神棚は子ども時代には82.9%とほとんどの家にあっただのに対し、現在では50.3%と半数程度に落ち込んでいます。それに伴い、「朝夕や命日などに、仏壇や神棚に手を合わせたり、お供えする」人の割合も、75.4%から42.9%へと減少しました。

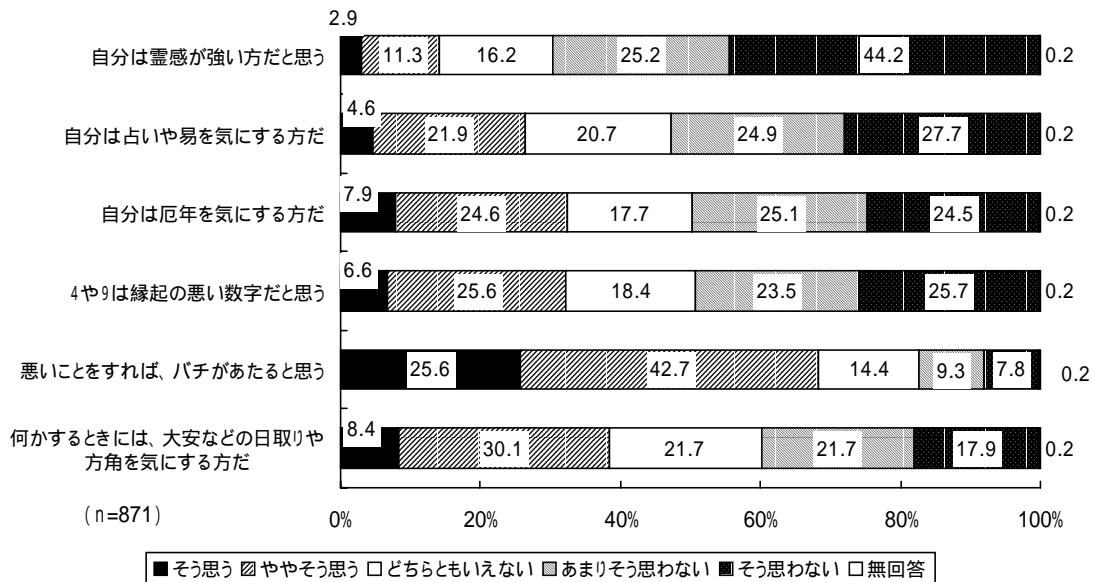
ところが、先祖の墓参りをする人は、78.0%から63.8%に減少しているものの、仏壇や神棚の保有率に比べ、落ち込みはそれほど大きくありません。核家族化が進んでいるうえ、マンション住まいや住居面積の減少など住宅事情の変化により、日常的に先祖祭祀する仏壇や神棚などの宗教用具は減少してきましたが、お墓参りの習慣は根強く残っているといえます。同じく初もうでの習慣も、毎年、「どこの神社の参詣者が多かったか」がマスメディアで話題となる等、宗教行事というよりは年中行事として定着している感があります。

このように、宗教用具を家庭内に供えて祭祀する日々の習慣は減少していますが、お墓参りや初もうでのような年中行事としての宗教行動は存続しており、これらは、一般的に人々が考える「宗教」とは別の次元で位置づけられているものと考えられます。

一般的な俗信について気にするか

大安などの日取りや方角を気にする人は約4割。

図表2 一般的な俗信を気にするか



日常生活における俗信について、どの程度、気にしているのかを聞いてみました（図表2）。その結果、「何かするときには、大安などの日取りや方角を気にする方だ」では、気にしない（「あまりそう思わない」「そう思わない」の合計、以下同様に表記）人は39.6%と4割程度でした。一方、気にする（「そう思う」「ややそう思う」以下同様に表記）人は38.5%と気にしない人とほぼ同じ割合となりました。P4で後述しますが、“友引葬式”を気にすると回答した人が58.7%（図表3）にも上るなど、葬儀の場だけでなく、六曜で日取りを決めたり、風水などで方角を決めたりすることが日常のなかにも多々見られるようです。

また、「4や9は縁起の悪い数字だと思う」についても、気にしない人は49.2%と半数程度でした。一方、気にする人は32.2%と3人に1人が縁起の悪い数字だと考えています。

次に、「厄年を気にする方だ」については、32.5%が気にすると回答し、やはり3人に1人の割合を占め、逆に気にしない人は49.6%で半数程度となりました。

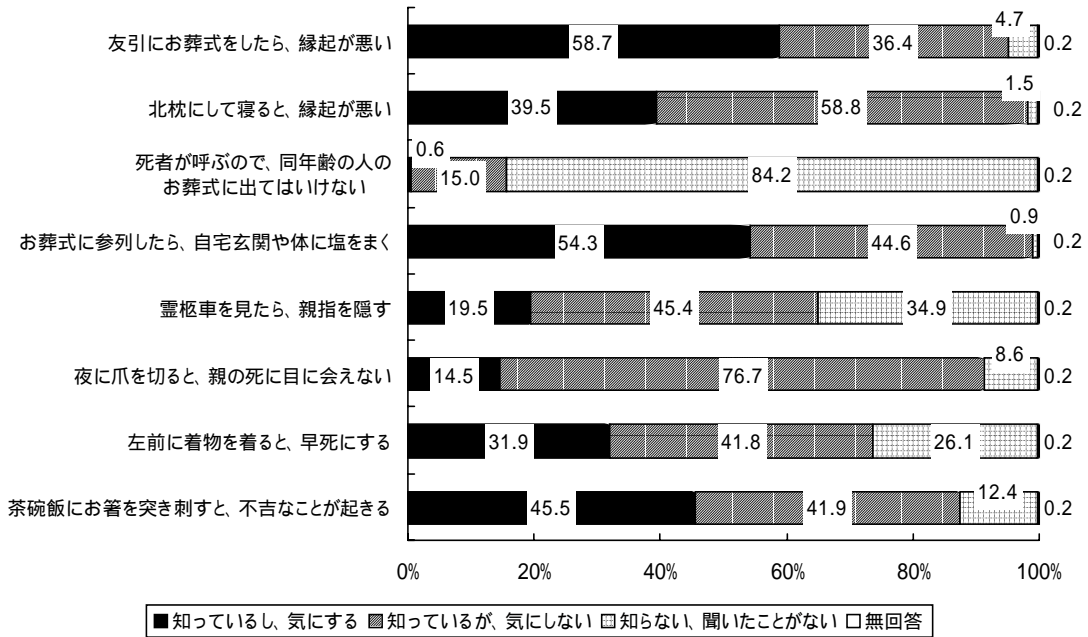
さらに、「占いや易」について気にする人は、六曜、数字や厄年を気にする人の割合よりは減少し、気にする人の割合は26.5%と4人に1人の割合です。一方で気にしない人は52.6%で半数程度います。

このように、厄年、六曜、占いなどを気にしない人は半数程度で、逆の見方をすれば、積極的に信じるかどうかは別にしても、日常の中で気にする人は少なくないといえます。

死にまつわる俗信について気にするか

友引葬儀を気にする人は、約6割。

図表3 死にまつわる俗信を気にするか



死にまつわる俗信のうち、ほぼ全国的に存在すると思われる8項目についての実態を尋ねてみました(図表3)。

その結果、気にするかどうかは別にして、死にまつわる俗信の認知率は全体的に高く、なかでも、「お葬式に参列したら、自宅玄関や体に塩をまく」、「北枕にして寝ると、縁起が悪い」、「友引にお葬式をしたら、縁起が悪い」、「夜に爪を切ると、親の死に目に会えない」は、9割以上の認知率でした。一方、認知率がもっとも低かったのが「死者が呼ぶので、同年齢の人のお葬式には出はいけない」という俗信で、わずか15.6%に過ぎません。

俗信を気にするかどうかでみますと、「気にする」という回答がもっとも多かったのは「友引にお葬式をしたら、縁起が悪い」の58.7%で、「お葬式に参列したら、自宅玄関や体に清め塩をまく」も54.3%と、過半数に達しました。どちらも、お葬式の現場で当たり前のように遭遇する光景ですが、実際に気にする人が多いことが分かりました。

一方、認知率は高いのに、気にしない人が多いのは、「夜に爪を切ると、親の死に目に会えない」という俗信で76.7%を占めました。また、「北枕にして寝ると、縁起が悪い」は、「気にする」人も39.5%と少なくはないですが、過半数の58.8%の人が「気にしない」と回答しています。

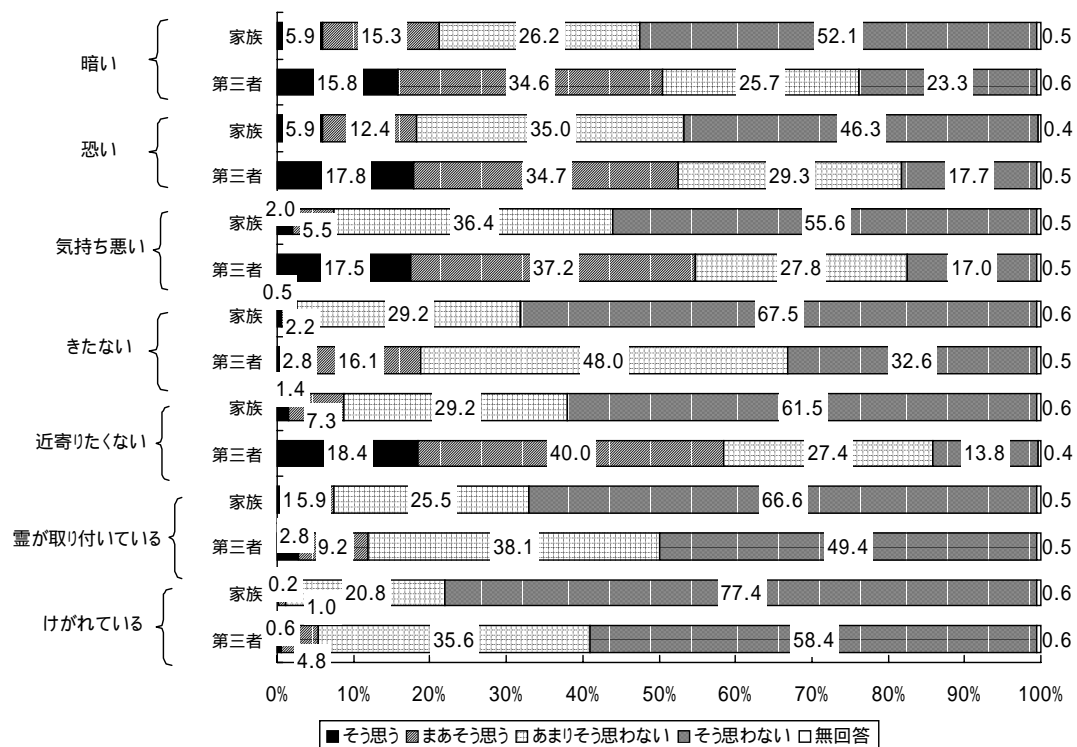
このように、知っていても気にしない人が多い俗信がある一方で、気にする人が多い俗信は、清め塩、友引葬儀、茶碗に箸を突き刺すなど、総じて、広く“習慣化”されている

ものであることがわかります。つまり、これらは“慣習”あるいは“しきたり”とされているため、意味を深く考えないまま、現在まで存続してきただけのようです。とはいえ、死に関する俗信の認知度は軒並み高く、我々の日常生活の中で、俗信が脈々と言い伝えられている現状もうかがえます。

遺体に対するイメージ（家族と他人との比較）

他人の遺体へ嫌悪的な感情を持つ反面、家族の場合ではそのような感情はみられない。

図表4 「遺体」のイメージ



実際の死に対するイメージとして、他人の遺体（三人称）と家族の遺体（二人称）でどのような差があるのかを調べるために、いくつかのキーワードを用いて聞いてみました（図表4）。

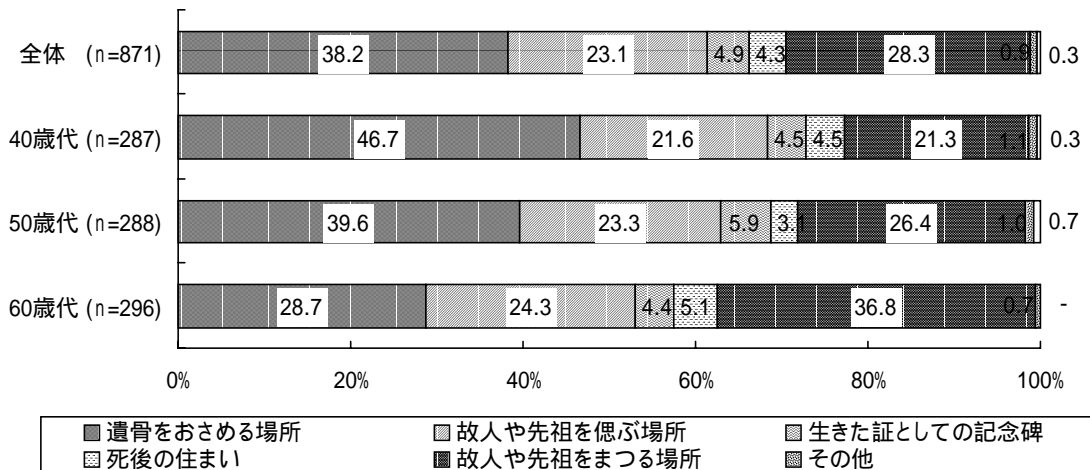
他人の遺体に対してネガティブな意見が多かったのが、「近寄りたくない」（58.4%）、「気持ち悪い」（54.7%）、「怖い」（52.5%）、「暗い」（50.4%）で、半数以上が「そう思う」「まあそう思う」と回答しています（図表4）。一方、「けがれている」（5.4%）、「霊が取り付いている」（12.0%）、「きたない」（18.9%）というイメージを持つ人は少なく、**他人の遺体へのイメージは霊的な怖さではなく、遺体に対する忌避の念を抱く人が多いといえます。**

一方、家族の遺体（二人称）に対するイメージは、他人の遺体へのイメージとは大きく異なります。他人の場合では「近寄りたくない」人が58.4%いましたが、家族の遺体ではわずか8.7%に激減します。同様に、「気持ち悪い」（54.7% → 7.5%）、「怖い」（52.5% → 18.3%）、「暗い」（50.4% → 21.2%）と、いずれにも大きな格差がありました。特に、**他人の遺体には「近寄りたくない」「気持ち悪い」と感じる人が多い反面、家族の遺体に対しては、こうした嫌悪的な感情がほとんど見られませんでした。**

お墓の意味合い

60 歳代の方は、祭祀継承物としてお墓を捉えている傾向が強い。

図表5 お墓の意味合い(年代別)



お墓は、あなたにとってどのような意味合いの場所かを聞いてみました。

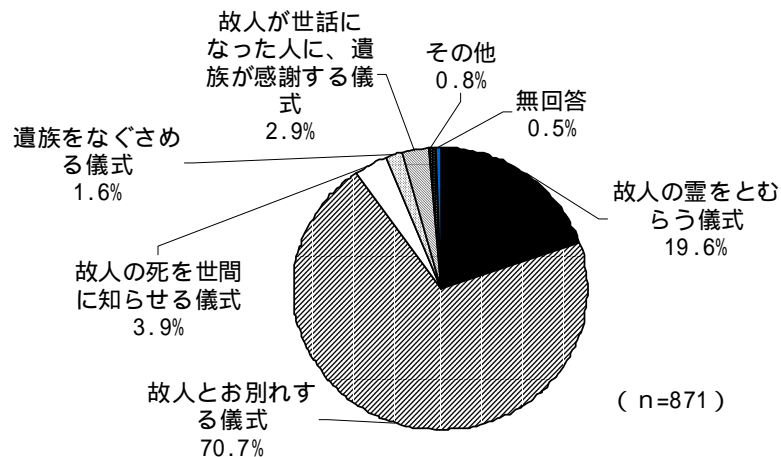
その結果、40 歳代・50 歳代では「遺骨をおさめる場所」と考える人がもっとも多く、一方、60 歳代では「故人や先祖をまつ場所」と、祭祀継承物としてお墓を捉える人がもっとも多くなっています(図表5)。

このように「故人や先祖を偲ぶ場所」「故人や先祖をまつ場所」と考える人は世代が若くなるほど減少し、代わって「遺骨をおさめる場所」だと考える人が増加します。つまり、若い人ほどお墓をドライに考えており、祭祀対象物や心の拠り所として捉える人が減少しているといえます。なお、統計上でも年代とお墓の意味合いには有意な関連性が認められました。

お葬式の意味合い

宗教的儀式から告別的儀式へと変容している傾向にある。

図表6 お葬式の意味合い(全体)



次に、あなたにとってお葬式はどのような意味合いのものを聞いてみました。

その結果、「故人とお別れする儀式」だと考える人が70.7%と圧倒的に多く、「故人の霊をとむらう儀式」と考える人19.6%を大きく上回りました(図表6)。つまり、お葬式において、告別式の意味合いが強く、宗教的な葬儀式の意味合いが弱くなっているともいえます。

また、地域共同体の結びつきが強固だった時代には、お葬式はイエの世代交代を世間に表明する役割も有していましたが、「故人の死を世間に知らせる儀式」と考えているのは3.9%にとどまっています。

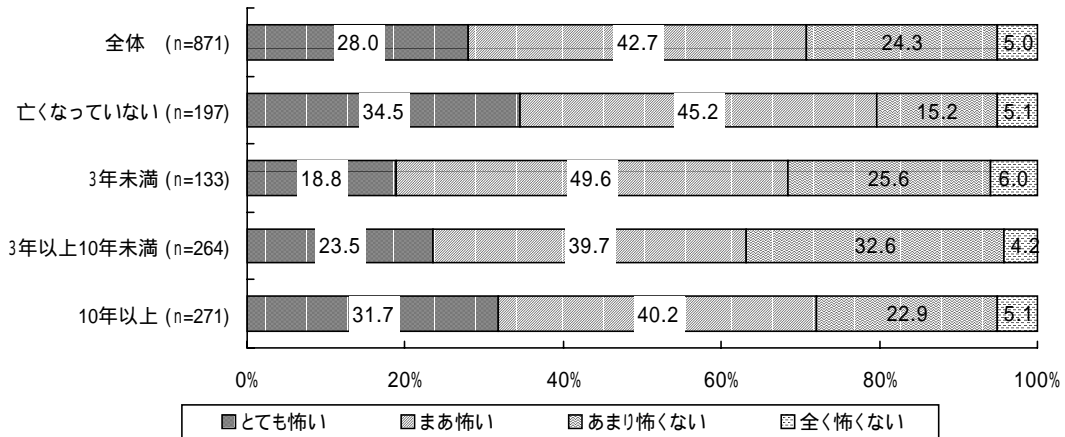
このことから、お葬式が社会的儀式から私的儀式へ、宗教的儀式から告別的儀式へと、意識の上でも変容していることが指摘できます。

図表は省略しましたが、性別で見ると、「故人とお別れする儀式」と考える人の割合は女性の方がやや多く、「故人の霊をとむらう儀式」と考えるのは男性にやや多かったものの、特筆すべき違いは見られませんでした。また年代別では、若い人ほど「故人とお別れする儀式」と考える人が増え、「故人の霊をとむらう儀式」と考える人は減りますが、年代による違いもそれほど顕著ではありませんでした。

死への不安

死への不安感は、家族を亡くした経過年数によって変化が生じる。

図表7 死への不安



死への不安は家族の死に遭遇した経験やその時期によってどう関連するかを調査してみました。

その結果、家族の死に遭遇した経験のない人の79.7%は、「とても怖い」「まあ怖い」の合計、以下同様に表記)と回答しているのに対し、家族を亡くして10年未満では、死が恐くないとする人が3割以上を占めています。ところが、家族を亡くして10年以上経過すると、死の不安を感じる人が多くなっていることから、家族を亡くした経験だけではなく、家族をいつ亡くしたかによっても、自分の死に対する不安感に変化があると考えられます。なお、家族の死の経験と自分の死の不安との間には統計上でも有意な関連性が認められました。

研究員のコメント

社会や個人のライフスタイルの変化により、我が国では、死をめぐる社会状況は大きく変化しています。しかし、意識や価値観は変わっても、死にまつわる習俗や慣習は連綿と
存続していることが明らかになりました。 信仰する宗教の有無にかかわらず、墓参りの先祖祭祀行為やお盆行事は、年中行事としてしっかり根づいています。

ここ 10 年ぐらいの間で、自分らしい死や最期についてオープンに語り合える風潮が出てきていますが、死のイメージは、それぞれの立場によって異なります。今回の調査では、家族の死と他人の死のイメージについてたずねましたが、「近寄りたくない」「気持ち悪い」「怖い」といったキーワードで大きな差が見られました。つまり、同じ遺体であっても、
家族の遺体と他人の遺体では、受け止める感情が全く異なるのです。火葬場や葬儀会館が
近所に計画されると反対運動が起きるのは、私たちは他人の死のイメージしか持たないためだと思われ
ます。

また、家族の死に遭遇すると、こうした不安度は一時的に弱くなるものの、死後 10 年を経過すると、不安度は再び強くなる傾向を示していることから、家族の死を直近に体験すれば、自らの死について考えるようになり、それが死の不安を軽減するのではないかと想定されます。

このことから明らかなように、いつか自分にも訪れる死を見つめることによって、生命の大切さはもとより、終末期のライフデザインを考えるきっかけともなります。誰もが死を避けられないように、社会生活を営む限りにおいては、二人称や三人称の死も必ず体験することになります。「自分の生命が大切なように、他者の命も大切にすること」が、死にゆく人を地域や社会で支え、誰もが安心して最期を迎えられる社会を構築する第一歩ではないでしょうか。

死を隠蔽する社会は、死の意味合いだけでなく、生命の大切さまでも軽くすると考え
ます。その意味でも、デス・エデュケーションの必要性は高まってくるし、教育現場だけの
問題ではなく、我々の意識を変革していくことが求められてくると思うのです。

(副主任研究員 小谷 みどり)